

令和 6 年 6 月 1 日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20H01302

研究課題名(和文) 上海フランス租界を結節点とする日仏中三か国の文化交流史

研究課題名(英文) The History of Cultural Exchange between France, Japan and China with the French Concession in Shanghai as a Nodal Point

研究代表者

榎本 泰子(Enomoto, Yasuko)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：00282509

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は従来の上海史研究で看過されていたフランス租界に焦点を当て、公文書・新聞・個人の著作など多様な資料を用い、文化・芸術活動の実態を明らかにした。特にフランス租界公董局の教育総監であり、戦後は京都の関西日仏学館館長を務めたシャルル・グロボワを、日仏中三か国の文化交流を体現する人物と位置付け、その事跡を実証的に解明した。上海発行の仏字紙を積極的に利用し、グロボワの音楽評論や、彼が関わったラジオ番組を分析したことも本研究の大きな特色である。三年間の研究の成果は、『上海フランス租界への招待 日仏中三か国の文化交流』(勉誠出版、2023年1月)として刊行し、広く社会に還元することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果である『上海フランス租界への招待』は、上海フランス租界についての専門書として世界初である。従来の上海史研究は共同租界に偏っており、英米を中心とする金融・貿易都市としての面が多く論じられてきた。本研究はそれらとは一線を画し、文化・芸術の実態や人々のライフスタイルに着目することで、東アジアにおける近代文化の中心としての上海のイメージを新たに構築した。さらに、上海フランス租界が中国近代文化の発展に与えた影響や、日本におけるフランス文化受容との関係性を分析し、日仏中三か国の都市を結ぶ文化的ネットワークを描出することに成功した。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on the French Concession in Shanghai, which has been overlooked in conventional studies of Shanghai history, and clarifies the details of cultural and artistic activities of that time using a variety of sources, including official documents, newspapers, and personal writings. In particular, Charles Grosbois, who was the Superintendent of Education of the French Concession and after the war served as the director of French Institute Kansai - Kyoto, was positioned as a person who embodied the cultural exchange between France, Japan and China, and his personal history was demonstratively clarified. Another distinctive feature of this study is the active utilization of Le Journal de Shanghai to analyze Grosbois' music criticism and the radio programs he was involved in. The three years of research came to fruition as the publication of Invitation to the French Concession in Shanghai: Cultural Exchange between France, Japan and China, Bensei Shuppan, January 2023.

研究分野：東アジア文化史

キーワード：上海史 フランス租界 文化交流 日仏関係 ル・ジュールナル・ド・シャンハイ 西洋音楽史 ラジオ放送 グローバル文化史

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

20世紀における上海租界史研究は、中国国内では反帝国主義・反植民地主義の立場から批判的に行われ、日本国内では日本人居留民への関心から行われたことに特徴があった。また上海租界には、イギリス人中心に運営された共同租界と、フランスの統治によるフランス租界が並立したが、主として言語の壁により、フランス租界についての研究は遅れていた。20世紀末より、中国各地の档案館(公文書館)・図書館の開放が進んだことや、租界時期の新聞・雑誌のデータベース化が進んだことから、上海租界史研究は大きく変化し、多言語を駆使した研究が行われるようになった。

日本国内では、大橋毅彦を代表とする「上海租界劇場文化の歴史と表象—ライシャム・シアターをめぐる多言語横断的研究」(科研費 23320050)のグループが、上海租界を代表する劇場に焦点を当て、複数言語の新聞等を資料として用い、異なる国籍にわたる居留民の芸術活動を具体的に再現する先駆的な研究を行った。その過程で、従来ほとんど利用されていなかった仏語紙『ル・ジュルナル・ド・シャンハイ (Le Journal de Shanghai)』の資料的価値を発見し、フランス国立図書館(BnF)に働きかけて所蔵分をデジタル化させることに成功した(2012年)。

同じメンバーによる後続の研究「1940年代における上海租界劇場芸術の連続性と他地域への展開の諸相をめぐる研究」(科研費 26284036)では、フランス租界が白系ロシア人などによるディアスポラ芸術の世界的な中心地の一つであったことが明らかにされた。また、メンバーの一人である趙怡は個人研究『仏文上海日報』(1927-1945)を巡る日・仏・中の文化交流(18K00498)で『ル・ジュルナル・ド・シャンハイ』(仏文上海日報)の精査を進め、従来日本とフランスの二国間関係の中で捉えられていた戦前の日仏文化交流が、実は上海フランス租界の動向と密接な関係を持っていた事実を明らかにした。

このように、今世紀に入って資料のデジタル化やオンライン化が進み、参照できる資料が増えたことにより、フランス租界研究は新たな段階に入った。従来の上海租界史研究において、フランス租界は文教地区として特色があったとされながら、その内実は十分知られておらず、フランス租界の行政機関である公董局が文化や教育に対していかなる政策で臨んでいたのかも実証されていなかった。本研究はこうした研究の不足を補うべく着想された。

## 2. 研究の目的

本研究は、上記の先行研究の一部メンバーが、劇場を中心とする文化芸術の研究を発展させ、上海フランス租界そのものを分析の対象とすることを目指して開始された。日仏中三か国という新たな枠組みを設け、より広い視野で文化交流の実態を解明しようとしたことも特色の一つである。従来日本国内の上海史研究は、日本と中国の二国間関係を超越することがなく、主として共同租界に居住した日本人についての研究が行われてきた。本研究は、メンバーがこれまで取り組んできた欧米人居留民(白系ロシア人を含む)の文化芸術に関する研究を基礎に、文学・芸術(音楽、映画、演劇、美術)・教育・ラジオ放送など、居留民の上海における文化生活全般に関わる内容を横断的に研究することにした。それによって、第一次世界大戦後から第二次世界大戦後までの世界的な変動の時代に、「東洋のパリ」と称された国際都市・上海の本質に迫り、国境を超えた文化の大きな流動や、同じ東アジア地域内の都市と都市のネットワークについて明らかにしたいと考えた。

## 3. 研究の方法

本研究は、『ル・ジュルナル・ド・シャンハイ』をはじめとする、中国で発行された多言語の新聞・雑誌などの公刊物と、外交・行政に関わる公文書の双方を用い、官民両サイドの視点から上海フランス租界の実像に迫ることを目指した。ただし、すでに述べたように、従来の上海史研究ではフランス語の資料を用いることがほとんどなく、特に中国国内の档案館・図書館に所蔵されているフランス租界関連資料の全貌は、中国の専門家にも把握されていなかった。

一方フランスでは、パリ郊外とナントにある外交文書館のそれぞれに、旧植民地の諸都市とフランス本国の間で交わされた文書類が保管されていることが知られていた。しかしこれまで、上海租界史研究を目的として日本や中国から赴く者はきわめて少なく、まさに手つかずの状態にあった。

日本側にも、日仏会館(東京)・関西日仏学館(京都)や、両者とそれぞれ関係の深い(旧帝国大学時代に研究・教育両面で協力関係にあった)東京大学・京都大学などの図書館に、関係するフランス語資料が所蔵されていると見られていた。

そこで本研究では最初に、フランス、中国、日本それぞれの所蔵先に赴いて資料の網羅的な調査・収集を行い、それをリスト化・データベース化することによって今後の研究の基盤とすることを計画した。

## 4. 研究成果

研究がスタートした2020年の春から新型コロナウイルス感染症が世界的に拡大し、3年間の

研究期間の大半は、国外・国内での資料調査に大幅な制約が生じることになった。2020 年度、2021 年度はフランスにも中国にも渡航することができなかつたため、海外で新規に資料開拓をすることを諦め、準備調査を通じて入手していた一部の外交史料や、『ル・ジュルナル・ド・シャンハイ』のデジタルデータを活用した研究に切り替えた。また、日仏会館や関西日仏学館に所蔵されている資料を調査し、そのデータベース化に取り組んだ。オンラインで頻りに研究打ち合わせを行い、フランスや中国にいる研究協力者の助力も求めた結果、コロナ禍初期の悲観的見通しを大幅に覆す、多くの新しい発見と成果を得ることができた。

#### (1) フランス租界の文化・教育界を代表する人物シャルル・グロボワの事績を解明

上海租界に一定期間滞在した欧米人について、従来個別のイギリス人、アメリカ人などについてはいくらか知られていたが、フランス人に関する研究はほとんどない状態だった。本研究では、フランス租界公董局の教育総監であると同時に、『ル・ジュルナル・ド・シャンハイ』に定期的に音楽評論を発表していたシャルル・グロボワ (Charles Grosbois, 1893~1972) に注目し、その公私にわたる活動を実証的に裏付けることを目指した。すなわち、インターネット上の家系図サイトや役所の管理文書を通じて彼の出生地や遺族の所在を突き止め、フランス在住日本人の協力も得て、グロボワが上海から持ち帰った写真や記念品などが今も保存されていることを確認した。2022 年 11 月には研究グループのメンバーが渡仏してブールジュの遺族宅を訪問し、遺品の写真撮影に成功した。グロボワが校長を務めたフランス租界官立学校の写真の数々や、中国の文化人から送られた書画などは、これまで存在が知られていなかったきわめて貴重なものである。上海時代のグロボワを知るこれらの資料や、出生・就学・従軍・結婚などに関する公文書を合わせると、グロボワの履歴の大半は解明されたと言ってよい。

また、彼が執筆した音楽評論を日本語訳して解題を付ける作業を通じ、当時上海の工部局オーケストラが演奏した曲目や演奏の実態、グロボワの審美眼などを詳細に知ることができ、1920~40 年代の上海音楽界の状況を初めてまとまった形で概観することが可能になった。ライシャム・シアターを中心とするフランス租界の定期的・継続的な音楽活動 (バレエ、オペラなども含む) は、上海在住の中国人や日本人にも少なからぬ影響を与えており、東アジアにおける西洋芸術の普及と発展を研究する上で、本研究は最も重要な基盤を提供した。

#### (2) フランス語ラジオ放送の実態や芸術音楽番組の特徴を解明

上海は中国におけるラジオ放送の誕生地であり、各国語による放送局が存在したが、フランス語放送の実態はほとんど知られていなかった。本研究は 1932 年に放送を開始したアリアンス・フランセーズ・ラジオ局 (FFZ) に注目し、『ル・ジュルナル・ド・シャンハイ』に掲載された番組表などを資料として、グロボワがパーソナリティーを務めた芸術音楽番組の詳細を分析した。毎晩 2 時間に及ぶプログラムに取り上げられた曲目を分類することにより、グロボワの選曲の基準や居留民の音楽的嗜好を考察し、フランス本国の放送とも比較することによって上海の特徴をあぶりだした。番組におけるロシア音楽の存在感の大きさは、上海に白系ロシア人が多く居住し、芸術活動の中心となっていた事実を反映しており、FFZ が「地域密着型」の放送局であったことを示している。

こうした方向性や、ラジオ局全体の運営には、FFZ の局長を務めた女性作家・ジャーナリストであるクロード・リヴィエール (Claude Rivière, 1882~1972) の意向が深く関わっていた。リヴィエールはフランスで教育を受け、アメリカの大学で教えたあと、タヒチやハワイで現地の音楽や舞踊に触れるなど、世界の文化・芸術に対する優れた感性を持っていた。リヴィエールは自らの名前を冠したトーク番組を持っており、文学・芸術・歴史・地理・時事問題などを日替わりで語り、中国文化も積極的に紹介した。フランス租界は共同租界に比べ、行政・教育などの面における中国人差別が少なかったとされるが、フランス語ラジオ放送におけるこのような取り組みは、フランス租界全体の思想的雰囲気にならぬ影響していたと考えられる。

#### (3) 上海アリアンス・フランセーズから戦後日本に移管された図書の実態調査とデータベース化

第二次世界大戦の終結後、日本軍が管理していた共同租界・フランス租界は中国政府に返還され、国共内戦・中華人民共和国建国を経て、外国人の資産は段階的に中国側に接収された。上海アリアンス・フランセーズの閉鎖に伴い、所蔵されていた 35000 冊を超えるフランス語書籍は日本に運ばれることになり、その一部が日仏会館、東京日仏学院、関西日仏学館の三か所に分けて寄贈された。一連の事実自体、現在の日本でも中国でも具体的経緯がほとんど忘れられており、今回、本研究によって改めて確認され、日本側の三か所で書籍の現物が調査されることになった。

旧上海アリアンス・フランセーズの蔵書は、背表紙に通し番号が付されていることと、扉に蔵書印がおされていることが特徴である。日本側の三か所で確認したところ、通し番号に基づいて (番号順に) 三つに分けられたのではないことがわかり、分けた基準や判断の主体はいまだ不明である。アリアンス・フランセーズの代表としてこれらの書籍の収蔵に携わったグロボワは、戦後 1953 年から関西日仏学館の館長に就任するが、関西日仏学館に移管された「上海本」の一部は、さらにグロボワによって日本各地のフランス関連の教育施設・文化機関に贈られた。

本研究は、東京の日仏会館と協力し、既存の蔵書データベースに新たに「上海」のタグを付けることで、約 4000 冊あるとされる「上海本」のデータベース化を行った。今後これを精査する

ことで、日仏会館に割り当てられた「上海本」のジャンル等の特徴や、利用目的・利用状況などの研究が進む可能性があり、フランス語図書の出版史・流通史や、東アジアにおけるフランス語教育史などに新生面を開くことが期待できる。

#### (4) 中国の近代文化の発展に上海フランス租界が与えた影響を解明

中国では19世紀末から外国留学が盛んになり、特に日本で近代化の方策を学んだ人々の中から辛亥革命の機運が高まっていった。1910年代以降は、フランス政府との間で教育面の提携が進み、1920年には北京中仏大学とパリ中国学院、翌年にはリヨン中仏大学が創設された。1920年代の「勤工儉学」（働きながら学ぶ）をスローガンとする留学運動により、周恩来や鄧小平など、のちの中国を率いるリーダーがフランスに渡ったことはよく知られているが、中仏の連携と中国人学生の送り出しに、上海フランス租界のグロボワが深く関わっていたことが明らかになった。グロボワはアリアンス・フランセーズの中国代表およびフランス租界公董局の教育総監という立場で、中華民国の首都南京に「中法友誼会」（法はフランスの意）、上海に「中法聯誼会」を設立し、両国の文化人を結集して文化交流の機運を高め、友好を推進した。(1)で述べた、グロボワの遺族宅で発見された中国の文化人の書画は、グロボワの中国文化界との交流の深さを証明するものである。

『ル・ジュルナル・ド・シャンハイ』は、フランス留学から帰った中国人にとって、フランスやヨーロッパ諸国の情報を得る手段でもあり、フランス語で著作を発表する場でもあった。著名な翻訳家である傅雷や、仏文学者の徐仲年は、それぞれ同紙に評論や翻訳を発表し、フランス人読者に向けて同時代の中国文学や芸術を紹介した。彼らのような知識人が外国語で発表した著作は、従来研究史上の盲点になっており、上海発行の外国語新聞の調査研究が可能になってようやく発見されたものも少なくない。本研究は『ル・ジュルナル・ド・シャンハイ』に掲載された中国文化関連の記事を精査することにより、中国近代文化の発展と発揚に上海フランス租界が大きく関わっていることを、初めて実証的に明らかにした。

以上のように、本研究は上海フランス租界に焦点を当てた初めての共同研究として、コロナ禍にもかかわらず精力的に活動を進め、多くの研究課題について一定の見通しや結論を得ることができた。2022年3月にはオンラインシンポジウム「上海フランス租界史研究の可能性——パリ・上海から日本へ——」を開催して問題提起とディスカッションを行い、その成果を踏まえて2023年1月には論文集『上海フランス租界への招待 日仏中三か国の文化交流』（榎本泰子・森本頼子・藤野志織編、勉誠出版）を刊行した。本研究のメンバーに加え、シンポジウムのコメンテーターや中国側の研究者などにも寄稿してもらい、15本の論文と1本の翻訳（解題付き）、オリジナルの地図や年表を収録した。上海フランス租界をテーマとした学術書として、日本国内初の刊行であり、学術界・出版界の注目を集めた。

本内容に基づき、2023年7月には日仏会館でラウンドテーブル（合評会）「上海フランス租界への招待」を開催し、多くの一般来場者をまじえて活発な討議を行った。戦前に上海に暮らした日本人の記憶にわずかに残るのみだったフランス租界に、学術研究の対象として改めて光を当てたことで、関係者から資料や遺品の提供の申し出も寄せられるようになり、今後新たな展開が期待される。研究期間も終盤を迎えてコロナ禍も一段落し、フランス・中国への資料調査や両国の研究者との交流など、当初計画に盛り込まれながら十分に果たせなかった課題が実行できる可能性も見えてきた。

上海フランス租界の研究は、テーマやメンバーをリニューアルし、2024年度より野澤丈二を代表とする科研費共同研究「上海フランス租界（1849-1943）の文教活動に関する多言語で領域横断的研究」（24K00102）として継続される。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 趙怡	4. 巻 117号
2. 論文標題 上海フランス租界と関西日仏学館 第7代館長グロボワ (Charles Grosbois) を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文学報	6. 最初と最後の頁 123-148
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 趙怡	4. 巻 第4輯
2. 論文標題 従上海到京都 高博愛与中・法・日文化交流	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 上海法租界史研究	6. 最初と最後の頁 3-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 趙怡	4. 巻 25号
2. 論文標題 上海租界のフランス語新聞が報じた日本文化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語と文化	6. 最初と最後の頁 129-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 榎本泰子	4. 巻 129号 (通巻289号)
2. 論文標題 上海フランス租界史研究の現段階	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 紀要 言語・文学・文化	6. 最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 趙怡	4. 巻 2021年号
2. 論文標題 『新法蘭西評論』( NRF )之中国新文学介紹 新文化運動与中法文化交流	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 新学衡 新文化運動的異途	6. 最初と最後の頁 96-116
掲載論文のDOI ( デジタルオブジェクト識別子 ) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 井口淳子	4. 巻 アジア遊学267
2. 論文標題 女性冒険家とラジオ放送ー上海フランス租界のクロード・リヴィエール	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中国の娯楽とジェンダー：女が変える / 女が変わる	6. 最初と最後の頁 25-41
掲載論文のDOI ( デジタルオブジェクト識別子 ) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 趙怡	4. 巻 アジア遊学267
2. 論文標題 上海租界のフランス語新聞が報じた中国映画とスターたち	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中国の娯楽とジェンダー：女が変える / 女が変わる	6. 最初と最後の頁 42-59
掲載論文のDOI ( デジタルオブジェクト識別子 ) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 榎本泰子	4. 巻 2022年6月号 ( No. 660 )
2. 論文標題 上海と日本をつなぐフランス文化 よみがえる「東洋のバリ」の面影	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東亜	6. 最初と最後の頁 70-75
掲載論文のDOI ( デジタルオブジェクト識別子 ) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 趙怡	4. 巻 アジア遊学269
2. 論文標題 上海租界のフランス語新聞にみる近代中国美術 林風眠と杭州国立藝術院を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 近代中国美術の境界	6. 最初と最後の頁 25-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 趙怡	4. 巻 第13号
2. 論文標題 ランバス一家と上海 (1854 - 1921) に関する考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 エクス 言語文化論集	6. 最初と最後の頁 239-266
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 森本頼子
2. 発表標題 1930 ~ 40年代の上海フランス租界におけるラジオ音楽放送 FFZの芸術音楽番組を中心に
3. 学会等名 第60回愛知音楽研究会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 榎本泰子・森本頼子・藤野志織 (編)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 299
3. 書名 上海フランス租界への招待 日仏中三か国の文化交流	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	趙 怡 (Zhao Yi) (10746481)	関西学院大学・経済学部・教授  (34504)	
研究分担者	藤野 志織 (Fujino Shiori) (40908844)	京都大学・人文科学研究所・助教  (14301)	
研究分担者	井口 淳子 (Iguchi Junko) (50298783)	大阪音楽大学・音楽学部・教授  (34402)	
研究分担者	森本 頼子 (Morimoto Yoriko) (50773131)	名古屋音楽大学・音楽学部・非常勤講師  (33922)	
研究分担者	野澤 丈二 (Nozawa Joji) (90742966)	早稲田大学・教育・総合科学学術院・准教授  (32689)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関